
ヒトガタ

papiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトガタ

【Nコード】

N4681J

【作者名】

p a p i k o

【あらすじ】

ある国の人形と人間の話

戦争が始まってしまった。

王や貴族たちの圧制に耐えかねた民衆の悲鳴が、革命を起こした。

「おい」

誰かが呼びかける。

おいのあとにヒトガタといわれた気がしたが、それが自分のことだとトモコは気がつかなかった。

気づけばぶん殴られている。結構、美形なお兄さんだが、目が怖い。

「ぼつとしてんじゃねえよ。お前の仕事をしろ。出来損ない」

「し、仕事？」

トモコは殴られたのに痛くなかったことに氣をとられていたのと、相手の言っている仕事なるものがなにかわからなかった。

「少佐あソレ壊れてんですよ。いつまでも連れてたらあんた死ぬぜ」

一見して軍人かと見まごうほどがっちりした男がからかうように言う。

なぜかそれは、トモコを非常に不愉快にした。

そして、一瞬のことだった。

体が勝手に動いたと思ったら、少佐をからかった男を投げ飛ばしていた。

「味方をなげてどうするか！」

ガツンと頭に鉄拳が落ちる。
なのに痛くない。

トモコは自分に痛覚がないことに気がついた。ふと、手をみると黒い。

コールドールのように黒い。
人の肌の色ではない。

ああ、アタシ人間じゃないじゃん。ヒトガタってことはサイボーグかなんかか

困った顔で少佐を見上げる。この男、背が高いのだ。見上げないと顔が見えない。

じろりと睨まれるけど、あんまり怖いと感じなかった。

「何だ？まだぼけてるのか」

「はあ・・・その・・・仕事ってなんですか」

トモコはまた殴られるなど思いつつ、少佐の答えをまった。
でかい手が頭の上に乗つくと、がしがしゆらしながら、死ななきやいいさとつぶやくのが聞こえた。

人間じゃないのに？壊れなければいいの間違いですか？

トモコははいと小さく返事した。

それから何日も闘った。

トモコは全身に武器を内蔵している。だから、ヒトガタなのだ。つまり兵器。
敵を倒す。

敵とは、帝国軍。

こちらは革命軍なのだ。だけど、ヒトガタは仲間として認めてはもらえない。

それは、元が帝国軍の兵器だから。

それを操れる人間もまた帝国軍の裏切り者でしかない。

革命が成就しないかぎり、少佐は仲間から信頼されはしない。

かわいそうな少佐

トモコは、そう思いながら最前線で帝国軍を打ち破っていく。

同じヒトガタが、出てこようと躊躇なく葬りさる。

そう、私はあの人の武器

トモコは、闘えば闘うほど自分が何者かわからなくなっていく。

何かの夢を見ているのだと、最初は思っていたけれど。

トモコという名前も、本当は自分の名前ではないような気がし始めた。

そのころ、ついに王城は落ちた。

ヒトガタの生産工場も破壊されつくし、王の首が広場にさらされる。

「おわかれですね」

トモコは笑ってみた。革命がなったのだから自分は処分されて当然なのだ。

でも、少佐は握った手を離してくれなくて。

「はなしてください。少佐。自壊の言葉はしっています」
「お前はそれで本当にいいのか、トモコ」

トモコは瞳をみひらいた。

少佐が名前を呼んだから・・・。

ああ、でも、もう国はないし

「守るものはもうないでしょう。あなたが願ったのは自由だから。
私がいてはいけない」

私がああなたの側にいるということは、最後の王の血がここに残っている証となってしまうから

「さあ、手を離してください。ユリウス王子」
「手は離さない。自壊したければ、自壊しろ」

トモコはうつすらと笑みを浮かべた。
そう、この名前は、この人がつけたもの。
ならば、コレが最後の命令。

「さようなら、お元気で、我が君」

トモコは自壊した。つないだ手だけのこしてばらばらになった。
こうして最後のヒトガタは世界からいなくなった。

革命も過去になり、人々は平和な時代へと歩み始めていた。

「ねえ、おじいちゃん。そのお人形アヤにちょうだい」

「駄目だ。他のなら好きにもっていけ」

「えゝだってこの子が一番可愛いもん。他の子は笑ってないもん」

「やれんもんは、やれんな」

アヤは毎年クリスマスになるとユリウスじいさんに人形をねだる。

じいさんは人形作家で、そこそこ人気があった。

でも、アヤはじいさんがいつも傍らにしている子供くらいの人形がほしかった。

まるで生きているみたいに綺麗な赤い目に、銀の髪をしていて、磁気のように真っ白な肌。

その肌をいつそう美しくみせる黒いドレスと黒い手袋。

世界に一つしかないその人形をほしがるのは、アヤだけではなかったけれど、じいさんは決して誰にも譲ろうとはしなかった。

じいさんはトモコとその人形に話しかけることがあった。

アヤはよほど大事なのだと、年をとるごとにだんだんと理解した。

そしてじいさんが死んだ日。

棺にトモコもいれてやった。

真っ白いドレスを着せて・・・。

なんとなく、そうしてあげることが、この人形とじいさんへのはなむけのような気がした。

一つだけ不思議だったのは、トモコの右手は真っ黒な金属でできていたこと。

それはアヤが昔聞いた恐ろしい帝国の兵器ヒトガタの手のようだった

た。

老人と人形は一つの棺に納められ小さな丘の墓地に埋葬された。

< 終わり >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4681j/>

ヒトガタ

2011年10月6日16時33分発行